リレーインタビュー 「私のsweet水都」

ヴィカース・スワループ

インド総領事

“インドの今”を発信していきたい

2009年にアカデミー賞、ゴールデングローブ賞等を獲得した映画『スラムドッグ$ミリオネア』。その原作である『ぼくと1ルピーの神様』の著者ヴィカース・スワループ氏が、インド総領事として大阪に赴任されています。今回は、各界から注目を集める異色の外交官の登場です。

大阪はホッとするまち

大阪は人も風景も温かく親しみを感じています。道を尋ねれば、言葉が通じなくても身振り手振りで説明し、10分ほどの距離であれば連れていってくれる親切な人々。まちを流れる川や運河と緑の水辺にも安らぎを覚えます。

食べ物もおいしいですね。お好み焼き、たこ焼き、しゃぶしゃぶ、うどん…。家族も皆、気に入っています。私は5つ星ホテルでの豪華な食事より、庶民的な料理が好きで、大衆食堂にもよく行きますよ。日本橋も楽しい町ですね。最新のパソコンや家電がそろっていて、しかも安い。息子たちと一緒に夢中で見て回っています(笑)。

庶民的で活気のある場所へ行くと、大阪は額に汗して働く人が担っているまちだという印象を受けます。また、東京は権力、大阪はお金を重視するという話をよく耳にします。「大阪人は商売に熱心で、あいさつも『儲かりまっか』だ」とか(笑)。でも私の見たところ、大阪人は心に余裕があり、人生を楽しんでいる感じがします。大阪は世界的な技術を持つ会社が密集する商業都市で、インドにとっては東京に次ぐ重要な取引先ですが、私にとっては“ベストシティ・イン・ジャパン”ですね。

近々『インド祭』を開催します

インドと日本は、古代から人と文化が行き交ってきた友好国であり、日本にはインドの伝統芸術の研究家もたくさんいます。この文化的な繋がりに加えて、昨今はIT産業などでの協力関係も高まり、昨年は日本の対印投資総額が初めて対中投資総額上回りました。大阪の総領事館でのビザ発行数も1日200人に達することもあります。私たちはこうした“現在のインド”も強く発信していきたいと思っています。

今年は久々に大阪で大きな『インド祭』的なイベントを計画しています。予定ですが、映画、ダンス、音楽、料理等、インドの多彩な魅力を楽しめる企画を練っています。

原作と映画の共通項は“希望”

「日本を舞台にした小説を書く予定は?」とよく聞かれますが、「外国人から見えるのは表面的なことなのですぐには無理」とお答えしています。ヤクザ、カプセルホテル、ラブホテルなど、面白そうな題材はありますが…(笑)。

『ぼくと1ルピーの神様』は、スラム街で生きる少年の物語です。私はスラムに住んだことはありませんが、徹底的にリサーチした情報で書き上げています。この原作と映画『スラムドッグ$ミリオネア』はかなり違った話になっていますが、構造的には同じです。ボイル監督は原作をきっかけにインドに興味を持ち、新鮮な驚きを物語に盛り込みました。ボリウッド映画(インド・ムンバイ<旧ボンベイ>で作られた映画)は基本的に夢物語ですが、本作にはリアルなインドが描かれ、しかも「貧しい子どもたちへ希望を与えている」と評価されています。原作でも映画でも誰かの希望に繋がれば、それは私にとって非常にうれしいことなのです。

ヴィカース・スワループ(Vikas Swarup)氏

1961年インド北部で弁護士の一家に生まれる。アラハバード大学で心理学・哲学・近代史を学んだ後、1986年にインド外務省に入省。トルコ、アメリカ、エチオピア、イギリスでの勤務を経て、2006年にインド高等弁務次官として南アフリカに赴任。2009年8月、大阪のインド総領事館総領事に着任。2作目の『Six Suspects』は今春、邦訳版を刊行予定。